ワイルドライフ・マネジメント・フォーラム in 札幌

「野生動物と共生する地域づくりを目指して」

2014.11.12（水）

北海道立道民活動センター　かでる 2.7

知床自然大学院大学設立財団は 2014 年 11 月 12 日（水）、札幌市の北海道立道民活動センターで、ワイルドライフ・マネジメント・フォーラム in 札幌「野生動物と共生する地域づくりを目指して」を開催しました。

講師の方々の報告やパネルディスカッションでは、ヒグマの事例を中心に地方と都市のそれぞれの観点から、「自然と人が共生する地域づくりにはどうしたらよいのか」「そのための人材をどう養成するのか」を考えました。

当日は札幌近郊中心に 124 名の方に足をお運びいただきました。関係各位の多大なるご協力に感謝申し上げます。

プログラム（敬称略）

開会あいさつ　田中　俊次
（知床自然大学院大学設立財団代表理事/東京農業大学名誉教授）

来賓あいさつ　川勝　富士男
（北海道環境生活部環境局　生物多様性・エゾシカ対策担当局長）

パネルディスカッション
「野生動物との共存と地域づくり」

問題提起：梶　光一（東京農工大学大学院農学研究院教授）
「野生動物問題の現状と地域社会」

報告１：増田　泰　（公益財団法人知床財団事務局長）
「知床におけるヒグマとの共存と地域社会」

報告２：佐藤　喜和　（酪農学園大学教授）
「都市と地方の野生動物共存の考え方～ヒグマの事例を中心に」

報告３：中川　元（知床自然大学院大学設立財団業務執行理事）
「共存を実現する専門職とその養成」

ディスカッション司会：梶　光一

閉会あいさつ：田中　俊次

問題提起　梶　光一氏　野生動物問題の現状と地域社会

北海道大学で修士号と博士号を取得。30 年間にわたりエゾシカ調査に従事し、北海道全域のエゾシカのモニタリングシステムと管理計画を策定する。北海道環境科学研究センター勤務を経て、2006 年より東京農工大学大学院農学研究院教授。知床世界自然遺産科学委員会座長として知床のエゾシカ管理計画を策定。日本哺乳類学会理事長。

環境省は 1978 年と 2003 年に 2 回、統計調査をやっているのですが、25 年の間にニホンジカは 1.7 倍、イノシシは 1.3 倍、ニホンザルは 1.2 倍に増えています。一方 1970 年に 50 万人ほどいたハンターが、今 20 万人ほどに減っています。数ばかりでなく、年齢構成も 6 割が 60 歳以上。どんどん管理の担い手が減っている状況があります。その中で、里地里山から人がどんどんいなくなり、耕作放棄地が増えています。これがまた動物たちの住処になっています。

ヨーロッパでもアメリカでも日本でも、狩猟が一般大衆に広まったときの大量捕獲で多くの野生鳥獣が激減しました。その反省からヨーロッパでは猟区制度ができました。一方、北米では州政府が管理人を設定して個体数管理を行う、狩猟を通じた管理の仕組みをつくりました。国を挙げて専門官を育成し、大学で野生動物管理のためのカリキュラムを導入しています。残念ながら日本の場合は法整備を行ってきただけなのです。1963 年に狩猟法が改正され「鳥獣保護及び狩猟に関する法律」ができます。要するに保護、乱獲によって減った動物を保護して、狩猟事故を減らすのが日本の法律の主眼だったのです。ですが、動物の数が増えて問題が起こってきている中、今年また鳥獣保護法が改正され、「鳥獣及び管理並びに…」と「管理」という言葉がようやく入ってきました。

国は向こう 10 年間でシカ、イノシシの数を半減する方針を決めていますが、誰がどうやるのか？　半分にしたとしても、知床のシカの個体数管理を考えると、とても問題解決するとは言えない。次は政策的に専門家育成のための予算をつくる必要があるでしょう。それと大学のカリキュラム整備。国をあげて人材育成する仕組みが必要です。人材を保証する認証制度、それもやがて必要になるのではないかと思います。

報告 1　増田　泰氏　知床におけるヒグマとの共存と地域社会

1992 年北海道大学獣医学部家畜臨床繁殖学講座卒業。斜里町知床博物館学芸員、斜里町環境保全課自然保護係長などを経て、現在知床財団事務局長・主任研究員。知床地域の生物調査や自然教育活動、世界遺産登録業務に携わり、現在は遺産地域の野生生物保護管理や調査活動に従事。獣医師。

私が所属している知床財団は、知床の自然を知り、守り、伝えるというキャッチフレーズで、知床に特化した形で野生動物管理などいろいろな業務をやっています。このキャッチフレーズはクマと共存を目指すためにも同じです。

まず「知る」という部分。相手を知らないと何もできないところがあります。特にヒグマが特徴的なのは、ものすごく環境に対する適応力がある。例えばシカが増加する中で、クマはシカを食べ物として利用するようになってきています。春先も越冬で弱ったシカを襲って食べる。20 年くらい前はあまりみられなかったと思います。またマスの定置網まで泳ぐ、舗装道路や暗渠を平然と歩くということも、周囲の環境変化に適応して変わってきた部分です。

次に「守る」ですが、よくクマと直接対峙しているところの取材を受けますが、実際我々の仕事のほとんどはその手前です。予防であり防御。要はクマに対して強い地域社会をつくるということです。例えばクマを誘引する野生動物の死体の回収、ゴミや人とクマの生活域を分ける電気柵の管理、草刈りなど、とても地道な作業です。

最後に「伝える」。これも知床財団として重要視しています。例えば羅臼町は幼稚園からクマ授業を行い、生態的なことだけでなく、危機管理的なことも含めて繰り返し学習します。斜里だと携帯電話の同報サービス「ほっとメール@しゃり」で情報を出す。その他看板、観光地でのレクチャー、こういう場所でお話するのもそうです。

とは言うものの、なかなかそう簡単に共存が実現するものではありません。折り合いをつけるのは難しいです。最終的にはやはり人の安心、安全を確保する。これが、人がクマを許容する前提条件となるのではないかと思います。

今知床では、対クマに対して一律のことをやるのではなく、クマの行動履歴（人を追いかけ回した履歴を持っているか。人為的な食べ物に餌付いたような記録があるか。餌をもらったことがあるか）と、実際そのクマが出てきた場所がどこか。国立公園の中か外か、市街地か、農地か。それらによって、実際に対応を変えています。

野生動物と共存するということは、人間の方がかなり手間をかけないといけません。今までのように魚を干せなくなる。ゴミの管理も徹底しなければいけない。というようなことも出てきます。なかなかまだ共存が達成できているわけではないですが、知床の実例をご紹介させていただきました。

報 告 2　佐藤　喜和氏　都市と地方の野生動物共存の考え方〜ヒグマの事例を中心に

1971 年東京生まれ。北海道大学農学部卒業後、東京大学大学院博士課程修了。博士（農学）。2003 年から日本大学森林動物学研究室、2013 年から酪農学園大学野生動物生態学研究室でヒグマの生態と保護管理に関する研究を続けている。日本クマネットワーク副代表。

今回、私の話では主に札幌市と私の主な調査地、十勝の浦幌町を材料に考えていきたいと思います。十勝では奥山または山麓に住み着いたクマが出没して問題を起こす場合、多くは農地へ侵入して農作物を食べる食害問題です。農家の数が減り、大規模機械化経営ですから、クマが畑に出てもあまり農家の人と出会わない。クマはあまり怖い思いをしないで畑に出て作物を食べることができる。一方都市の札幌市の場合は、奥山、山麓部に市街地が隣接するという景観構造になっています。その結果、クマが出てくると即市街地に出没ということになります。

十勝平野では生物多様性を保全するため、防風林や河畔林はなるべく連続的に残し、野生動物の移動を確保するコリドーの役割が期待されてきました。しかしコリドーを保全すればするほど、そこからシカやクマが市街地まで入ってくる事例も出ています。札幌市も同じように、緑のネットワークをつないで生物多様性を保全しようという考え方があります。しかしこれをつないでいくと、例えば豊平川をつたってクマが市街地まで入ってくる問題も同時に起こる。ですから、生物多様性の保全と野生動物の管理は同時に考えなくてはいけない問題だと思います。

浦幌では出没被害が続くので、地元の方は、山麓のクマは絶対増えていると思っています。ところが奥山を調査すると、1978 年と 2014 年の最新のデータを比べ、増えている様子はない。被害が出るので出没に対して箱わなを設置して駆除する。そうするとこのクマはいなくなる。ところが山は白糠丘陵の奥の阿寒湖、知床半島までつながっていますから、次から次へ他のクマがやってくる。奥山よりも畑の近くの方が生息地として魅力的なので畑の近くに下りてきて、箱わなに入ると駆除される。ということを繰り返します。ただこれを続けていくと、山麓ではクマの数は増えているように見えても、奥山のクマが枯渇したら、奥山も山麓もクマがいなくなるという事態になります。そうなる前にどうにかしませんかという話をしますが、今以上に手間をかける必要は特に感じていないのが実態かと思います。

札幌市では、もう山麓部に繁殖メスが定着していることがわかっています。偶然若いクマが迷って市街地に出る時代ではなく、札幌の山で繁殖しているクマがいつでもそこから出てくる可能性がある。「ここはクマなんている場所ではなかった」「クマが出てきて困る、駆除してくれ」という一方で、「出てきたクマは何も悪くないのだから

駆除しないでくれ」という人までいろいろな意見の人がいます。その中で合意形成をしながら、どうしていくかを考えなければいけない。もちろん状況に応じて駆除も必要だと思いますが、駆除だけでない予防的な対策も同時にやっていくべきです。そこで札幌市がどうヒグマを管理していくのかという「全体計画」が必要になってくるでしょう。しかしそれを作るためクマの動向はまだわからない。科学的な根拠を持った対策を行う必要がありますから、きちんとした生態の調査やモニタリングが重要です。

手間も暇も金もかかる大変な問題ですけれども、このまま何もしないわけにはいかない。国は環境省や林野庁、北海道、市町村、それから地域住民、大学や研究機関、または民間の会社やボランティア団体、一致団結してこの問題に取り組んでいかないと、なかなか解決は難しいかなと思います。

報 告 3　中川　元　共存を実現する専門職とその養成

1973 年北海道大学農学部応用動物学講座卒業。中標津町農林課勤務を経て、斜里町立知床博物館学芸員、知床財団事務局長、知床博物館館長を歴任。2013 年より、知床自然大学院大学設立財団業務執行理事。鳥類を中心に知床の生物調査や野生生物保護に携わり 40 年になる。知床世界自然遺産地域科学委員会委員。

他の講師のお話を聞いておわかりのように、野生動物問題は今あまりにも複雑で、奥が深くなってきています。解決するための体制、つまり各地に専門職の配置が必要であり、専門職養成の仕組みづくりが急務だと思います。ではどこで養成するか。これは保護管理の現場が最適でしょう。知床では日々、ヒグマやシカ、他の野生動物、植生の保護、いろいろな問題に取り組んでいます。オンザジョブトレーニングとして勉強する、育てることが可能です。それから調査研究の成果や問題解決の蓄積があり、これも資源になる。このようなことから自然大学院の構想ができました。

知床地域と呼んでいるのは斜里町、羅臼町、標津町、清里町。ここは世界遺産に登録された自然環境や多様な野生生物が生息するだけではなく、農業、漁業、観光業など活発な産業活動が隣接しています。世界自然遺産をはじめ、現在 17 種類、27 のさまざまな保護区もあります。知床地域をもう少し広げてみると、斜里中心に 50 キロ圏だと 10 の市町村。100 キロ圏、日帰り圏では 28 市町村。さらにさまざまな自然地域、例えば知床にない広大な湿原や大きな河川などのエリアも入ります。

具体的な知床自然大学院の構想を簡単にご紹介します。主旨目的は「野生生物と人間社会の軋轢を解決し、共存策を担う専門家を養成する」。課程、形態は 1 専攻の専門職大学院大学を想定しています。学位は修士（専門職）となります。学生だけでなく社会人や留学生も受け入れます。教育内容は、生態学や保全生物学等の自然科学分野はもちろん、野外調査や社会学的な分野も必要でしょう。また地域の合意形成や相互理解を導くファシリテーション能力、コーディネーター能力が必要です。そのような能力を持つ人は、幅広い視野を持つ地域のリーダーになるような人だろうと思います。卒業後の進路は、自治体や国等で野生生物の対策を担当する行政官やあるいは公益法人、企業等の環境関係の部門で働く人、環境 NGO や環境教育機関の職員の方など。

現在、専門委員会を設置して具体的な大学院計画をつくっています。こういったフォーラムを開催して、必要性を皆さんにお話しているというところです。実現への行程として、今年と来年で大学院計画を策定し、設立資金を確保しなければなりません。そして文科省への申請をして、順調にいけば 2017 年に開学ができるのではないかという計画です。

私たちの活動は賛助会員の皆さん、支援者の方々の寄附金、これらの浄財によって支えられています。この場を借りてお礼申し上げます。

パネルディスカッション（質疑応答）

梶　光一　（司会）
増田　泰
佐藤喜和
中川　元

質問１

共存策を担う専門職の養成が急務なのはよくわかりました。ただそれを本当にすぐやるのなら、例えば近くの網走に東京農大がありますよね。あそこにそういう機能を持たせてやってもらう方が、ゼロから大学をつくるよりは、すぐに育成できるのではないでしょうか。

中川 元

おっしゃる通り、知床に一番近い大学は網走の東京農大オホーツクキャンパスです。もちろん私たちはまっさらな大学院を、独自で何が何でもつくるということではありません。いろいろな形で連携や協力関係を保ちながらやるのが現実的なことになるかもしれません。ただこの構想、計画としては、理想的な計画をつくって、独自で行けるプランの中で、どのように協力いただけるかだと思います。農大や酪農学園大学、東京農工大のようにワイルドライフマネジメントをやっている大学があるので、そことの連携は考えていく必要があると思っています。

質問２

駆除するか守るかなど、人間社会の間でどうしたいいかという意見の分かれ、それに対するファシリテーション、そこの苦労は実際どんなものなのか。体験談や事例があれば教えていただけますか。

増田 泰

はい。言葉では言い表せないようないろいろなことがあり、非常に難しいです。地域の中でもいろいろな意見があり、知床の場合は報道も多いので、地域以外からもいろいろなご意見をいただきます。地域向けの発信として最近やっているのは、井戸端会議のような感じで、ざっくばらんに我々がやっているのはこういうことですとお話して、逆にいろいろな意見をいただいています。住民にはそういうアプローチができるのですが、住民以外の方からは一方的にお電話をもらうということもある。その後のコミュニケーションが難しく、非常に残念な気持ちになることもあります。そのかわりこういう場で、地域以外の方にいろいろなお話をするようにしています。

佐藤 喜和

地域では行政が最終的に判断を下していくので、あまりいろいろな意見が入る前に現場で対応しているというのが現状だと思いますが、外部からいろいろな意見が入ってきて困る現状はあると思います。それをうまく捉えて、きちんと説明できるような根拠を積んでくれればいいというのが私たちの意見です。特に札幌では注目度の高い問題だと思いますから、クマが出てきた段階であまり議論をしてもしょうがないので、もう少し前の段階で、きちんとした根拠を持ち、行政はどういう場合にどういう策をとるということを決めておく。それに関して、いろいろな立場の人の意見を聞いて調整しておくというのができればいいと考えます。

梶 光一

私は以前、道の研究機関でメスジカを中心とする個体数の削減計画の立案に携わりました。メスジカの個体数を減らすことを 72 年ぶりに解禁して４万頭獲る、という計画を出したときに、非難囂々でした。知事宛に公開質問状が何件も来るということを経験しました。ただ研究者ですので、全てのデータの公開を繰り返してきました。最後は了解をしていただいたと思いますが、相当の摩擦があって、やはり科学的な根拠を持たないと、多様な価値観を持っている方には説明できないと。価値観を超えるにはデータが必要だということを学びました。